

Title	<海外デザイン研究誌紹介>Design Issues
Author(s)	伊原, 久裕
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 123-124
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52772">https://doi.org/10.18910/52772</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Design Issues: A journal of history, theory, and criticism

『デザイン・イシューズ』誌は、デザインに関する歴史・理論・批評の3つの柱を掲げた学術雑誌であり、アメリカのイリノイ大学シカゴ校（スクール・オブ・アート・アンド・デザイン）から年2回発行されている。1984年の創刊以来、現在まで9巻が刊行され、私の手元にある最新号は9巻2号（1993年春季号）である。この雑誌については、藤田治彦氏によるデザイン史の観点からの紹介がすでにあること<sup>1)</sup>、また、1989年には、1984年から1987年までの既刊6冊を対象としたアンソロジーがそれら6冊の編集者であったビクター・マーゴリン Victor Margolin の編集によって、出版されていること<sup>2)</sup>などの事情から、多くの会員にとって既知の雑誌であるかと思われる。

『デザイン・イシューズ』誌の母体は、イリノイ大学シカゴ校のマーゴリンと彼の同僚を中心としたグループが1982年に発足したフォーラムに由来している。掲載される論文のカテゴリーは、デザイン史、デザイン批評、デザイン教育、デザイン理論など多岐にわたっており、その対象もグラフィック・デザイン、工業デザイン、インテリア・デザイン等さまざまである。また現在まで以下のような特集が組まれている。

- 4-1/2 非物質社会のデザイン
- 5-2 工業製品意味論
- 6-1 アジアとオーストラリアにおけるデザイン
- 7-1 デザイナーの教育
- 8-1 快適さのアイデア

また、論文寄稿者の国籍は、アメリカを中心として、英国、ドイツ、イタリア、フランス、オーストラリア、インド、中国などであり、若干ではあるが日本人の名も見受けられる。この中には、すでに我が国に翻訳紹介された著作のあるアブラム・モル Abraham Moles、ビクター・パパネック Victor Papanek、ゲレット・ゼレ Gert Sele、ジョージ・フラスカーラ Jorge Frascara、クラウス・クリッペンドルフ Kraus Krippendorf らをはじめとして、トマス・マルドナド Tomas Maldonado、グイ・ボンシエーペ Gui Bonsiepe、チャールズ・オーウェン Charles L. Owen、ロビン・キンロス Robin Kinross ら著名な研究者も含まれている。

次に『デザイン・イシューズ』の編集の特色、目標等について簡単に述べるが、それには上記のアンソロジーにおけるマーゴリンの序文の中の「新しいディシプリンとしてのデザイン研究」と題する第一章の記述が非常に参考となる。それによると、そもそも、この雑誌のモデルは、建築雑誌『オポジションズ (OPPOSITIONS: A Journal for Ideas and Criticism in Architecture)』であったという。『オポジションズ』という雑誌が、建築界においてどのような位置付けがなされているかはわからないが、この雑誌に限らず活発な議論のある建築界の状況が『デザイン・イシューズ』誌の発刊の一つの要因となったようである。

マーゴリンの記述から『デザイン・イシ

ューズ』誌の目的は、さしあたり二つの点に集約できるように思われる。まず第一にデザインに関する諸問題を、習慣的な枠組みにとらわれることなく多角的に議論できるようなフレキシブルな場を提供することであり、第二にそうした諸議論の所産をより広い定義に基づいて組織だて、関連づけることによって新しい専門分野 discipline としてのデザイン研究を確立することである。

ここでいう習慣的な枠組みとは工業デザイン、インテリア・デザイン、グラフィック・デザインといったカテゴリーであり、この境界にこだわることも、単にそれらの融合を主張することも適切ではない。そうではなく、「それらの位置関係を新しく定義すること、個々のデザイナーが今よりもっと大きな範囲の問題に対処できるようにすることで、異なるタイプのデザイナー同士により大きな協力体制を容易にすること」が重要なのである<sup>3)</sup>。事実、デザインについてすでに多くのことが語られているものの、それらは断片的であり、「デザインすることとは何か」という中心的定義へと統合されるような機会を持たなかったのである。

では、新しい専門分野としてマーゴリンが期待するデザイン研究とはどのようなものだろうか。残念ながらこれについてははっきりと述べられてはいない。けれども、マーゴリンはデザインの現状の把握のために参照すべき学問領域の例として社会学や政治学、文学などをあげており、デザイン研究というものをどちらかといえば人文社会科学に深いかかわりを持った領域として位置付けているようである。実際に『非物

質社会のデザイン』(4-1/2)、『工業製品意味論』(5-2)といった特集では、デザイン領域外の専門家として社会学者が招待編集者として招かれているが、このことにも上述のマーゴリンの意図がうかがわれる。

むしろ、以上の解釈はあくまでもマーゴリンの考えに基づくものであって、彼の考えのみがそのまま『デザイン・イシューズ』の編集に忠実に反映しているわけではないだろう。実際のところ、マーゴリンによる編集が3巻まで続いた後は、5~7人制の編集委員会(メンバーに変動がある)による合同編集形式が採用されているからである。

ところで、私自身、この雑誌から得たものは少なくない。グラフィック・デザイン、あるいはタイポグラフィ関係の論文も多数掲載されており、それらから、たとえばジョージ・フラスカーやロビン・キンロスなどの興味深い研究者の名を知り、彼らの他の論文や著作にふれるきっかけとなった。おそらく、工業デザインやインテリア・デザインなどを専門にする方にとっても一度目を通す価値のある雑誌ではないだろうか。いずれにせよ、『デザイン・イシューズ』誌のような国際的かつ総合的なデザイン理論誌の類書がほとんどない現在、その存在意義は大きいといえるだろう。

- 1) 藤田治彦『アメリカにおけるデザイン史研究の展望・1948-1988』、デザイン学研究(日本デザイン学会)、72, 1989, p. 15
- 2) Victor Margolin ed., "Design Discourse", The University of Chicago Press, 1989.
- 3) *ibid.*, p. 4

伊原久裕 九州芸術工科大学